

# 悩み・苦痛の逆療法

## 第1部 解脱の真理の発見

### (23) 悟性が理性と感情を調和させる

前項において、理性の世界と感情の世界において住み分けが大切であることを説明した。しかしながら、人が、生活をしていく上で、理性と感情の妥協点を求めて判断・行動をしなければならぬことも確かである。この時に重要なことは、悟性が理性と感情を調和させることである。悟性の詳しい意味は次項で説明する。

悟性による理性と感情の調和を説明するために、カントの「道徳律」と、カントの性癖について話をしたいと思う。

カントは「世の中で思えば思うほど、美しいものは夜空に輝く星と、我が内にある『道徳律』である」と言った。

そして彼の「道徳律」は、「もっとも道徳的なことは、性向、即ち性質上の傾向とか気質で行うのではなくて、義務感でもって行うことである」、というものである。

例えば、飢えている人に何かを施す行為が、その人の慈悲深い性格から行うのは、それほど道徳的ではない。そうではなくて、物を与えるのが義務であるから行うというのが、もっとも道徳的であると言っているのである。

この事例を理性と感情の関係で言うならば、慈悲深い心で物をやるのは、感情・性格・情緒で行うことであり、義務感で物を与えるのは理性で行うことである、と言えるわけである。すなわち、自分は本来ケチであり、飢えている人にでも物を与えたくないが、与えることが自分の義務であるという理性的判断から、施しをすることが崇高な道徳なのであると、言っているわけである。

従って、もし、もともとケチな性質の人がその性質・性向に抗って義務感で以て物を恵むということは、誠に崇高な道徳であると言っているわけである。

確かに、これはまことに真理であり、極めて明確に道徳性というものを定義しているものである、と考える。これは理性的に道徳というものを深く洞察した結果としての、カントの哲学の真髄の一つであるわけである。

しかし、ここで問題にすべきことは、ケチな人が義務感で飢えている人に物を与えた時に、感情的に惜しいという気持ちが生まれるが、それをどうするかの問題があるわけである。このような感情は崇高な道徳のために抑圧すべきである、と言ったところでそれは内攻してしまい、葛藤を起こすのが人間であると思う。

その感情の問題をカント、並びに西洋哲学者は無視していることが大きな問題なのである。従って、西洋のことわざに、「哲学者は日頃偉そうなことを言っているが自分の歯の痛いのも我慢できない」ということになるわけである。

ちなみに、これだけ道徳的であったカントは、一方において、高利貸でもあったと言われている。高利で金を借りる人達は、よほど切羽詰まった人達であろうと思われる。その人達に高利でお金を貸し付けたカントは、彼の「道徳律」に反しないのであろうか。

逆な見方をするならば、カントが極めて理性的であって、自分のケチな性質を抑制しようとするほど、ケチになってしまい、やむにやまれず高利貸になったとも言えるのではないであろうか。

ここに、理性による感情抑制の大きな限界が露呈していると思う。

ここで、上記の事例を使って、理性と感情の妥協点を求めることについて説明したい。例えば、多くのホームレスが飢餓に瀕して物乞いしている。これを見た人が、「一方において、自分はケチであるので人に金銭・物を恵みたくないという感情がある。他方において、自分も裕福ではないが、このホームレスは明日にも餓死してしまうかも知れないので、人間として何らかのものを恵んでやる義務があると理性的に考える」。

この時にケチという感情の欲求だけに基づいて何も恵まない行動を採るのか、それとも理性の欲求だけに基づいて、すなわち義務感から自分の持てる全財産を恵む行動を採るのかが問題である。この場合には、どちらか一方の欲求だけで行動を決めるのではなくて、悟性に基づき感情の欲求と理性の欲求の調和点・妥協点を求めねばならない。例えば、自分の財産の20%の金銭をホームレスに恵むとかである。

この時重要なことは、これらの二つの欲求の調和点・妥協点を決める悟性が悩み・苦痛

で曇っておらずに正しいものでなくてはならないことである。この場合の悩み・苦痛には二つあって、一つは、感情の世界の悪い感情、すなわち、怒り、ねたみ、悲哀、ケチ、憎しみ等々に起因する悩み・苦痛である。二つ目は、感情の欲求と理性の欲求の相克からくる苦痛である。例えば、前述の例で、ケチで恵みたくない欲求と義務感から恵まなければならない欲求の相克、更には、どこに妥協点を求めるかの決断の苦痛等である。

これらの苦痛が強いと悟性がくもってしまい、悩み・苦痛の少ない欲求の方に決定がゆがめられてしまうのである。従って、これらの悩み・苦痛をしっかりと意識し更には強めることにより、悩み・苦痛を緩和し消失させることが必要なのである。

いずれにしても、人間は理性の世界と感情の世界に住むのであるから、どちらかだけに偏った欲求に基づいた行動は正しくないのであり、悟性により両者の調和点・妥協点を求めることが不可欠である。

前項で、夏目漱石が「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。無理を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい」と言ったことを述べたが、やはり理性だけとか、感情だけとかに偏重した「無理」を通した行動を採れば窮屈、すなわち、居心地が悪いのである。従って、悟性による感情と理性の妥協点・調和点を求めて判断・行動することが肝要である。

これを短歌でまとめると、以下の通りとなる。

## 行動は 理性だけでなく 感情の 欲求配慮し 悟性が決める

最後に要約すれば、「判断・行動は悟性に従わねばならない」ということである。すなわち、「やらなければならないことはやり、やってはならないことはやらない」ということである。

すなわち、「感情は抑制しないが、行動は悟性で抑制する」ということである。これは一見矛盾しているように見えるが、可能なのである。そして感情の苦悩はしっかりと意識し、噛みしめ味わい更には強めれば緩和・消失するというのが、人間の心の本性なのである。